古今著聞集　十六　（元禄三年版）

椙山女学園大学デジタルライブラリー

椙山女学園大学図書館


古文孝経集
十二

共同研

北林図書館蔵書之印

古今著聞集巻第十六

興言利口

興言利口ハ当座ノ興ヲ催シ、人ヲ笑ハスル事ヲ先トスト雖モ、或ハ放遊ニ得意シ、或ハ時ニ当テ口ヲ滑ス事アリ。

桂蔭

5780540

久安四年正月廿日、まつりの使有盛
舞下臈まで車ゆるさるゝ事
ふるひまれなりし事
仁平二年三月廿八日、初参をとげ人
判官為重の花見舞人として
きもをつぶして花見ひさうやまふ
事ども
為重が見物の事
下部武正が力わざの事
一条のわたりをはしる事
ふなづ武正が俗名
つねでりて、まりをうち、侍にて武正が
の松衣ふいて、かへるとて、





五

おほきなるそでひき出で、宮仕をもこころざしゆゑ
ゆゑしき名聞をも思ひて、そばなる雑色どもに
仕ふれ、と云ふも侘びしくおぼえければ、
寄りて酒をすすめなどすれば、あるじ着たいて
くはふるぞ、いひそれが難するにまけじ劣らじ
うするかしひくあんの男ひかりそうな
んどのやうにそんや
後日大炊御門大路にて小舎人童ども
ども、今は酒つき給へまひらうとぞ
ぞ返すと

さてそのあとまでつまぬ大路は
りもの酒肴をもたせてゐりをり
中院右のおとゞ、いまだ中将にて
宮おはしける時、ある女房
おもひかけて、ひそかに
人をつかはしけるに、いたうしのびて
抱きのおとゞおはしまし所にて
わたりてこゑばかりにてやがて
てぐひをそんさうらはんとよ

のわしとさへびやくまでるといふそうさてまいりまぎの事一ゆりまゐつてぞ

松雲接待の比財美日領ところやに奈の美をとりかめされうきうさまでいふ有の役ちうう好とそきうにざうされたいと面白あるすれぐびんをもうさわけでいるくぎをゆうちきあてありこうりをあ下さ申候ひて川はくろひく美ぐさは仰出されくれバ面白かふびんうさあげて仕まつりそうう後美ぐをうゆうなりとて女人の關かめされる狐妻長下好、熟系ごふこうゆとていさぐ候り

ゆ六

ゆさへ狐猿かうう仰のうり面下とそ仰出されるれバ美ぐ出あ面りかふびんさ光かくはぐよりうう弁を始うるとかされぐ有のおやせんうかつくれうう狐猿なーうくいひとのをはまでそうそうぐかーめとそつかめされるきうひ事あーうくかつうさ仰されバも美ぐ松面れ女人とかうしたうおうぐ松ぐー

奈美仕まうぐーかりきる活て指活ぐを始てきう活面活のぐの仰財ぐ家の長よあされうきるて一門の若丸收かふぐひなき美仕事活のひとり活若ぐ

いづれもいづれの日かはらんずるとこそおぼえね
ども、ただ今日明日とのみ思ひて、ひとり
法師を頼みてすぐるほどに、年ごろ住みつる
ところをも、すこしづつ荒れゆくを嘆き、
いかにしてもいま一度、もとのすまひに
なほしてんと、あるひは人にも語らひ、
あるひは自ら思ひめぐらすこと、よろづ
日ごとにやまず。かくて二年ばかりを
へだてて、ことしの春、ついに思ひ
しごとくに、もとのすまひになしつ。
いかなるさいはひのよろこびぞやと、
人ごとにいひはやしけり。

物言ひ人今参りて、著聞集と名づけ

うりまろが河をつくりて船遊をこのむ事は、作りつくめ
らるゝ時、さる者作り始めたるにや。
ひめもすにあそびありくをもて業とせるにや。
きびん人道風たちにいでゝ法ひろめ勧進ありき
て檀那の別当なりき。侍従にて書役小舎人
せて、公卿をこそ、さは作りもあれが列に
らせつるこそ著道かなとぞ申されし。
ありしてゐこゆるぎの磯清らかにて
ざりそかいよく三年三百三十三首の
法をせよとや作れをれば著道なりとぞ

者ありて仏うくらのうちにて力をあらそひ
きそふ事ありしとき仏をくしてかをりこと時に入道夜
うらうの仏をせさる事なひくやまとうぬりのうの法師ハ
ふつのごとやせ仏うきをりをする上臈をりをするうん面
なりうし山伏業をうを面一なるふ山をへてるまへ
ばをりの時をうし先しうりをふとうやさおくてをて
後よいでうさ法ありき法一めすづさ
をに法師寛侯いあざ元侯してをる時六条房の
山臓法ふめをれうりをる仁僧来れいまく参ふ法ふ
あふと侯ともけうのあをふ面よふひのくりうそれ

どもうこへづさふあをあでですだ侯をる仁山寛侯づふ
ゆくしあるふの彩小笹ふとうけくまりうをふ法室
毎日小法ふめて仏をれをれうんづうし侯あでふ川
くしうさしまづさる仁寛侯うりふうふん寛ふ
侯ふうけうふ侯ふめのふ人分をあいいる仁ふと仏華
ゆくふ法ふまりんぎるて仏をふめしへまの
しふで寛侯ふもおでうる仁侯ふくうしうふうぐ元
ふ方をりふ人の法将ふまでえづうき事侯うをて
あしうふめうふ法ふ二ふあしづ寛侯てをふもくも
なうふうんぎうふ死ふ侯をりて侯果ふふ法ふて事ぐ



ねうのこおひくくてそれとひさせんとて売てる拍子
いろてう表紙ひでさしこうはいてべふ法の仕事をとげ
せう法とこゝろまちがひてこゝろをれだてまりくむさ
いそれてもそのまゝ逃度ふ新堂がふ当ふるよ
さてもおもしろこれう後生の時いかゞ歩行和
もひくへ今度半のあけるくと会はよいひそれが其
ふうんふてそうのけてまりこねいぞにもての
経いゆぞ打ーと余儀なくあうまくの仕業梨
のまりてとこるひそるとそ四人くでか着二人ふかく
きてゐる人まをるに生えだてあり生ふるてくへ



主やれくさき雲の内よりいひくるゆかうをうちて只二人
ぐみをあ〳〵いくたくりうんぞくあくる迄
るまでそれがさをあつびうち給ひまへおいうち給り
うちぬやいひくるさ迄もやいかうべきは是非るこ
或日又あ〳〵車もひゝれくまりそうに寒宅寄る此の夫
をひたくたゞ法師のうちひ〳〵と小袋ゆ表う
をこ迄が回わこそ〳〵さ倍ゝ人を〳〵あるがりをこて
あ〳〵あ〳〵起ありて伯〳〵いあるをおくしをこびを
かをこてお撰すりありたゞひれ〳〵と永沼て山法
師ゆうちまろぶりてぐりこねをのまゝ仲のある文学

似のごとくんハ力をつゞめ事なりやすきをもてゞ道理
あてゝ極のごとくなり

一條二位入道 経保 のもとにて下女敵討と云沙汰あり
おくうりこゝろづくゝ後ハ狂乱の後絵をまで
さかひにおりよ初よりきろにはなしもれひとり
こそ事法の者あてハ仕おほせて一度ハせめきる絵
侍事ハおくむ事なり色ゝ言ふよをまで過ぬ事
なのめおゝくハ人ゝこゝろをうり侍共皆ゝうりそうゞ
そゝとりてんやくゝなゝこゝろをうにはなゝしをも
くゝそてんくゝひろる絵侍事ハよつゝめでよくゝ

とゝてゝれ一方小めくゝおゝくひてぞうなゝ
きてゝあるほせてゝべきゝれ川あゝてゝ
よゝひくゝとうおさ事ハとゝべーゝ名ハ
べなゝこゝろやうにゝうおくゝべーとゝいひくゝあてぞうかく
てなゝこゝどゝろゝよろゝどうて件のゝれおゝさそう
り事のごくゝゝおうりてゝはおさてゝいつう
人ゝすうゝなゝこゝろてゝおゝうりてゝなの日へつゝさへく
きれゝゝゝおうくゝうゝゝ今所ハおくかうゝとうりて
死ぬ事おてぞうこゝ侍ハ沙人ゝうすうくゝおのさう
おくゝひつる侍ハ同もおやおおゝゝくゆゝ

して川の中をおよぎわたりぶじにおこのもの
ばかり下部武者ひとりあとを禦ぎ戦むりへもろ〳〵
きもいだしてくだりてあやまをせでありまし
せをでんでさみだれ衣小さのこれをうばとろ
ふ所に二人と供せさるもろ人ぐゐぬぎすて打物とり
ひろげぐをうち合ふひとあひのつづきさるり
のせてやうく渡りつりんとぞいひろ山武者何事
かよ伯けうのうん国防ぞ判官季綱は引け引け
きるにくかんようの伯をろ
風俗いとすさまじき浦うりやうの

しやうかんとてひらまをそうく
かくうみをれびをぞてゆうさをれみをり
坂の院の手ぜめつうふ前後師ふをう作う後
ださ事のうく急ぎまのまて作ぐをうをれで
あうう海きき大伴ろすてひすすをやをる
きくいまうとうきうけてうてまうさ
そてひてまりのへしかさうをうこの
あのてびくありふ面れうこ伯うれみやう
ぎそて盛不のお伯ーをう安房ふみんをしてなげ
うりをぬそふりて前後師うりやうかうひてい

六波羅殿にて御酒をくゝさゝれ引出物ありけるに
御まへにまいりふれこぶをとりてかたのごとくまひ
うたひてさしおかれければ
ふるもののでんぢうたうにあらねどもこのかたをばえこそ
捨まじかりけれ
とぞ申ける
かくてまかりいでゝ
ふるものはそれぞとばかりおもへどもいかにしてかは捨
ふなるべき
とぞいひたりける
又ある時

ありそうな物のおそくなるをもつけの武家うんぬんなどいふ物のうそれを程あらきりそれりうてうんぬんかくうてあおぐうまでぬきをりをれバぬけうげいかくたあうごうをうそれうそ武家などおおくの領の所生ことは人のひくの同法附弟郷の僧六人うり風流柳とおさきありをうれめんくりうてくまものうすをて柳ごとに弄ぶて付うをうえいらんありてひくーそれうとびさ義えうーりうんとそのさ

当ふけうこれとらまのりうこぬりひあれのくつうまの川波をうでし六首と二そうてうまでしやぶくこれをれべとうぐたつうう油うりをうなうさのさうきみうぬいたてあーそれとられよあくさつうん

院ちうりには人真のをうゆうおん

治郎に為宝酒井の家かく納涼せられる

う油会法師その座うつうなりをり番数れおあくこ治郎ふうふいひの名あんじとやひさ法者うう着香のひさきの六時きうぬきて硯

歌の様にくちびるを吸うて居る間に、
みるく歯もなくてうひうひしうなんて、法師を
ふところへ
花ぴらのやうにやはらかくなつて
法師にいげ無のり句なりやうてどこへやらみのし
ろ紙るのうこ吸ふく
わをつつとけて吸ふらみせん
と付うをるに満座ようりをうゑ笑言へ
ようくひうぐさ事く
ひ法師娘るのさらく命ん和のまた舞よさい

ちうふん和とばせとして級迦堂のまへのさくら
りをて鞠ばけ和ばたいご法師よとちう
うこれをみかこ思んうそうしくゆびのねを
をまどよくさこれうたりうこめ法師と
そ人をいひる
進士志宣政やいよさもいの学生ありをるわう人
のりやまるの湯へ外とて汐腸を人ふかりさ
つまを法師一把ていうをうとんく二ほてかり
くめるうとなりとそうくとべうへてきりをわ
うさになりてそなよた衣のの汐入くうに

のごんとーきみふるごうのこれんわひりあひろ
下人わりてそーのせそれぞもそれぞくくのりまび
らふ狂りん人ふあひくわれくいたとひまごひ
ふとりそごえくきりりーきりなこぐ海ー
さよめそぞ
ろ弁入道ごうんとうくしたのとたもかふしたりき
中太冠ろくいふらーぬの中間ろくこに約勝ひ
あ弁りありきろ弁一うけうきせうろ弁ふ宝ふ
ろて今くふ後そびあろくごさりのともそぞわれ
そびさてたぐらたごうんぞくしんなとひりきろにく

行ろーかぐのふ色事な死ふきろ弁助へ
かろろ弁ろてはうろゆつまろ
ろ弁ふ・て人共ふ死ふゆのろ弁も
ろひろくふなこれろかろくろ
治宝元年元二年十月廿八日文永改元
まりのきりを海ー装束ろきろ弁
ろて七下ろくふ事かぐりなー宝元ろれを
まろくふろいわげをなりてを見ふたろ法
ふわりんぐろくのまふ、んごてやきろいひふ文
海のさくぶんは名袍をそまりてはりー弁

人〳〵のくちのまりふるやうにて世まとめに
ちやうねんをへしいさゝかそのうたがひ
しるまじきことの物譬にもかゝりなりけり
世はさまざまにしく事ばかりなりけり
もと人ふるす事ばかりなくて新しくわろきも
のゝてまさりたるいまやうの人ぶりあり
ふりぬれどいそがしくいろ〳〵の事ありて
てらまゐりなどのたえまなきやうにて
あかしくらすほどのまぎれにあるやうなり

てゐたれどもうけていたかる事ばかりそ
そのめきれどまいてひも洞ごとのうん事や
とうぶつ一宝殿ご一車とめしてふくろのへ
しかきれわかくさうぞといひそれぞれ不自
おうぶんやうにくり
法をも初心のときよく談るあり
下野の狩武山荘小人きりきれば外ざうり僧ゐ
ありもろに大服のいまくしきるほゐて狩武う
しりそうに洗人うつくまろんとのたうち
ありけるの一巻とくうぼさいごんの教ゐやいある

ありきうとて
頓而流行うたふ
あひく雑談(ざつだん)一きうに内裏の妻かうり小びん
小のの小さびんをでいふ流行うたふ
いうにさびんをでもあいうきうに
てんをうそめ面(おもて)をいひうれいのあり
けごりぐうかりかりてねこづきうけうびかう
まへうきうに今小うえうんぐ面(おもて)をいふ流行うを
良(よ)かりやうてうれのうそかうまへいふ一うな

かうをてあうぐひうえんくぎりのいにまへれかうへ
もう川ぶねの花うひうぐいうぐあてうえばうまへ係
ぐうへいうえうまへうえ川がうていねへへ月流行うを
一きうにひうまおうえたうにあうぐうえくえ二条
あうぐ氏うりぐ流行へうえうにあんれぐくたぐんの
ものあの男れあうぐうぐいう流行をうえうをうくへ
あねうあてにうえん海うへ海うへ海うへ月流行うて本面(おもて)れ
そうをいくうえうへんとうする時びねへきうくう
うえうを本うをねうくうきうをあうびあうえうにれうす
いふ本面(おもて)うを南無堂(なんむどう)のうへ人れ陸(ろく)に抱(だ)うにれて通

さうもの多事なるゆゑにわやくうのひてたゞまゐりぞこゝろぐるしき事なれどいかゞ御口入をも給りつゝをのづからいとまなくてそうりなる程にやがて中ねわうそでゆきぐれまいりてうかゞひ参りたれど今夜はでんかのつぼねの房にぞ御宿のかこみてとゝのふりたそこゆゑぐるしき宮仕へのこれこゝろにまかせぬ事をなれど大ぐさ御事をばぬぎ給ふべきにてうりぐをばゆゑぐるしきことにおぼしめしたるやうにて女房ども御ぐしをかきなでまいらせなどしてうちやすませ給ひぬ

おなじ御ふところやくうの下人祇候してうく参じうりぐ給はりてふところをおさへて二条わたのそこぢを南のおもてなる御等院の角ふそうをわうりてうちたゝきてありをりそのまゝ御ゆあびまれど此ほどのおぼつかなくやうてそう宮仕がよりもいあれば御ぐしもおくしの御ものゝ御ぐしなどうる事やいつくまつるまでこゝろもとなくおぼしめしつゝ川いでのそこびと下人どもをそうびあつめをうりおうしれうしぬ

此女房の御ぐしの事ふいとまなくして紀事をも給はり

さう医師 時めきひとの病悩とていみじき御師
もろもろびとあまたおこせひかるに日数をへ
ふ験のおこりぬる程びんこかむりてやあらむ
ひくさくくびくさくびくさ引ぬきてなりん
ぬいひこりぬる程びんごとりもあつぼそろる御よ
うんかんとていまし御ぞとかにころいと給ぐさて差
こりけるころ後のぞやあり一かりぬりたびひり
かくごれのみすてのこと多運ぎ房ハ尾張そ
ひきり四月の初ふ時ぬりむとあかむひりくおひ
ぐこれハなりうひやとれハ時かくや事のは

ふひくさびこりぬれでびんご盃当ふこりてきの
むくさはなりうとぐとりてひとおくえくるこれもい
みぐくいひくくりるあこそ尾張ハ喉病ぬして
ふぐひきる程痛ふとふ梅とそ行ぬやこのみぞそ
ひくりぬ治ぬるふ脇鬼病ぬやくりぞやこふ
ありぬれん痛ねさくバひんありしと熱じてぬを
いひありぬりとぐくるあふこそたぐひてなる
同流一巻ひりの物者代くいみとのありぬり後
あて之間云痛ふなりて仰ますやあさな元ぬり
不便のりのふえて先てくくりくめーくひぬるが

今ハ昔、□□の事ニ□□ト云フ人ヲ□□ケル
ニ、年モ漸ク老ヒヌレバ、心ヲ発シテ、
偏ニ後世ヲ願ヒケルニ、年来ノ間、
仏ヲ造リ奉ラムト思ケルニ、
ヤヨ□□ト云フ所ニ、皆ナ、ビヨキ礼堂ヲ造リ
テ、仏ヲ安置シ奉ラムト為ル程ニ、
□□ト云フ所ニ、亦、礼堂ヲ造リ
テ

なごやいひそれで孝道おくれたりのりて
くやくへんなさてこまにそうをくれくせかやと
さまかくいくとりをいの多くおをいそれをうあさ
くいよおをたっやうらおへいさしよおてさべ
ーあれとたるやおりみさねいさべいそひまん
とおふをせまへいもくかのこいさべいさるひ
んおまへをのべさそれおていこれいへまへだうさ
おりふこねいていさうこいまづそれでひれらね
そるくみあまくいさべまれてひまつくされ
へーといいそれでゆあたおたやへうにいすこ

やうにさうてあうねへいーさてやでてまかり出てれさ
えつうでくおをるにいよくあへひかなりていまま
ゆさうをれでせんうふでおりさうは奥式薬法
さおさうなうー
お明院よおいあだうといふ雲あり漢源入道さ蓮の
が尝へつあうら孔そいまこうを面代つをそるう
つくさのれそのでうら拾でうすそて聖覚法橋
の流孫の事をで代かうりそのお一りをせう
でくおうー樂小うれくそのまへとおりを面よ
これうら拾でうり小智会のやいふをともあるか

有法師ことごとめてあやまちこの童えやそ
まれの童えやそ〳〵稲あはくらんとりあつりあ
らんとりつわらはべ稲の穂みくいわ童でも
なござめんとうれのるそぞゆへをかの童
こそのことは法師人よかくろて笑ひ
み宮仕稲倉夜舎の雀を警蹈三つあるう
女ぜむくく妻よこてうそうたうの女ぐつくひる
ものゆふはくの女ありきうそれ妻ひ警蹈
あ稲ふうけくひまをぐれこひそれどまたう
ありくてひのくをそうありて雨ふひるのて妻よ

ひりくいひそうへかつけくそのそぐれわ
ぜともうくなくかさいそあくをれこあ
ぐくてやひぐるぜそのはくれ女これ
あそをぜくあえぐくゆーき手ぢをへ
い妻のあこふまやうあぜぐちふみあかこちの
よ紀ふをぜーみまひことがこれをぐれこあよ
もあびなるれあうくかくの稲ふぐこと
いこぐ警蹈いまぐこうぢぬう法びいつくー
つびとそ男一のねこいふなりこれバあうーそ
くやぞこいひそる紙きて妻世ふあもた

とくさんがのうへの山にてとりつぶれ死申されまつりけり伊勢国にてさいごうの名代そうれ次第のおいへんまねどもらいうてくらひくてあるひおろさおありけるの女ねぶとさぞあるんじ事おのひとあるべーやいひうをれバ盤亀くらひおさらくうるりうりう

いづきの法ね事おう山伯おあるさとをおひて児おぐしをして作生伯（まいり）うりう巡礼（じゅんれい）そくそく今いうくなんと志ろう附児どもいあうひ治氏伯くうは水練（すいれん）を業（ぎょう）としてだり治う事おう伯

なりいうべーてあるべきといひそれば住伯の片へ住伯やうてお人うちのおをうくひいうべーさやいひりうりうをれば住伯のおるふいうやいろ死るおあてひとさおう事一つうりう山治氏業（ぎょう）の片今ばひて一人をうべくをくほうれまでやひうりうをれぐらうあうべくさのくうりうりうあはのおて二三町ぐうりうあぐ死うを伯住よくるを衣のわざやうなるて出給のお指の裏（うら）壊（くわい）のひざわてしさうけくるを伯七年余うおやわうんとうあ伯一人うぐ死うさわびて伯

のぞりて、「いかゝ」といひければ、「まことに
みつぎの事、承り候ぬ。」とて、ゆるしつかはしけり。
ちからくらべなどしていかゞはせんずらんと、
人々の出仕をまちていられけるに、これたゞひとり
ぬをもしれるしりのある生涯（しやうがい）のいたんなさまにて
うしを後の木にゆひつけ、いとくかつがうに
そふるてい、あつぱれ綸言（りんげん）のたふとさよと、見るをおどろ
うてありさま
ある夜だれ如房とそら法師とをりふしあひて、
つゞみうちあひてありける夜、法師ものゝきこえ
ありけるを、

まこへいづこにあれあること、如房ふしぎのおもひをなして、
そらのてまりをなげられさぶらひて、ゆきあひ
をれば法師もひきりてさぶらひけるが、
あひまりもでおせんとおもひおもひ、
あのひとれんとおもひきびきと紙袴（かみばかま）にて
着ながらまづ一ぢやう（でう）ばかりうちあがりて、
ひとつうちければ、如房あをのけさぶらひえあと
ふかくこのうちくびつかみてさぶらひければ、
こびをのまへにてぞひれふしさぶらひ
あえぬありさまやとびえて、男泣（おとこなき）ふうに

[illegible]ふ事ありて、[illegible]
の津[illegible]ぐてのやどりをかりて過
りてやどりたるに、[illegible]
[illegible]ぐらくふかくて、[illegible]
さうぞくまでひきかへしてあるに、[illegible]
男わらはをまいらせくいでしてあるに、
きおんとおぼえしが、すだれをつとかきあげ
てまぐしをけづるまでうつくしげなるに、

まれて、年[illegible]ばかりなる男わらはめでたくしたてて、
[illegible]
[illegible]
[illegible]

あるにおそろしき物のいでくるをみて、妻これをいそぎめでて、その化物をとらへてくびをきりければ、化物のくびきりてのちもくびばかりにて、つゐに女房のつまでくびりころしてけり。いとおそろしくぞ聞えし。

うづまきといふ男ありけり。ある女房をぬすみもちて、ふかき山のなかにすみけり。男わやうのことにて、女をなぐさめんがために、ありとあらゆるたからをもとめあつめてあたへけり。女いとよろこびて、ありとしもあるべくもあらぬ山のなかにて、かくのごとくたからをもとめあつめたるこそ、あやしけれ。

ぞおもとつぶさにこうじてをりけるに、ある人がうあり。いそぎらいこうにまゐるべきよしをぞこうじける。しかるにこのひとりめのしうとの素服(そぶく)をきてをりけるを、ふとみつけて、ひきうるをきて、物ぐるひのまねをして、物をうるにや、とおもひてをりけるに、ほどなくかへりきたりて、ものをばうるにもあらず、ただ、ものをばとりかへしてぞかへりける。

ある女房、ものへまかりけるに、ゆきあひたりける男、ものをいひかけたりけるに、女房、

そこをのりこえてにげさりぬ。
をのこども
ひきつれてあとをおひけれども
道あしくてえおひつかず。
そのころ三人ありける男一人のりてとほる
をみつけて三人一度によりあひて
ハねおとしてけりをのく打ものをとりて
わるびれもせずをのく物をばとりぬ
ひとりをばとりのこしてにげさりぬ。
ハねおとされたるおとこ
ほどなくほかよりきたりあひたるものありて
まのあたりいひしらせければ
てがけ人〳〵物ふさりてまいりあつまりて
つるぎをぬきてをのをのきりころしてけり
ハねおとされたるおとこ
ことのほかによろこびて
ゆるしてけり。

してうこのでくおこあひをろよう〳〵ふてのこうれそも
ぐふいあやうつまこをもろべくひふれいそだくろ男
あれべくさだぐろてのがりはぞこいつだいたいでろち
のつかふてめてくそんをでこあをれれこうでいぐぬ
をほはのりあがりとあをれれありをれがれ
がりあをまりなーこを狂よ秋あをふをれだ
えおをていのだにいつあう納まのくあいいだくあろ
そこやくあでこせむまだ大ろこふつぬつおれがくる
くあーがふそ納えそくぼのかふてまひそあがしい
あにまろへまを接よねりつまんとてかくわだにくだー

のりのさとりをひらきてげつさうのみちこそ
とりわけのぞみが難(かた)かりけるにのぞみをとげん
或(ある)ふるひとをそばへ念仏をすゝめけるに
ちゝもとんの女房其中(そのなか)に念仏者(ねんぶつしや)にけるを
まもりいてゝなをあいしうしんとこゝろざし
うあいごうをれバとうくまめくしくり返のはゝ迫
とつゝそこも事久をとゞめて何とおもくこゝわりてう
ばどのゝこゝろもてらしねんといひうをこゝろ
をゝすいてぐ人々をごりやうをうけよ念仏の
そんどうくふまでうして南無阿弥陀仏の南無を

さゝをおもくこゝろにとゞめおもひ入ぬ
ひ法一生涯(しやうがい)の思(おも)ひ出(で)ぞとうちまもりて
ゝあはれよさてげりやうをまつぞとうくひさう
でなをゝねんぶつをとなへつゝ息(いき)のたえ
てうつゝくえんはそくそれいでバとんごのあり
よあ仏をおもくねりふかうりう落(らく)ひとすぢ事
もおくひとこんふかうりて日数(ひかず)を送(おく)るをりふし
そてやひごとんぶもせバ人こゝろをうべまて
うのあまのりをよろこびあひ侍(はべ)りあまつさへ世(よ)の尼
も例(れい)のごとくにをれて尼のまうとしてこゝろをひ

うぐひんとうひくりもうさうのこにくねりこんせ
のおいーあんばやでてあるどのおすゑ（おとゝ）おく（彼おとゝ）
ばしほねむりうらうらだくいめくうぐすくえあるぶ称
んでなられるおいひうでせふうへのそめやうにへ
たうやづうへつくまろんとてありしゆべしーごろ
称くたーぶふおられくこのむうこおうこうぞ
あてのぶむをーくなうーぬうんくうあぶうくうく
まつこのえ、くまでもかのふすぐくうべかやうの
ぬくんそのゆあうようへそのべうめつうるてす
りやゆうてあてひとういひうれべげおうもうへのそ

おいおぬぬれたうーなうて人をかーうをれぐ
そんのそこをべきつねれあうらいひうあぬぞも
あうーぞうれべうあくうけうてぞうしほもうべ
ありせてろうらしてをつをものをきうこそべうあ
うやつうふうらいぐぬまめみーくきうをえ女ともえ
ぬてすくうろあうかてうんおてこにそそそうへせう
なうりをれべ一をぢにあの中の幸いひうけてみのれ
大うぶれりの中で伯そうかてこもうもうねえ今へ
そ行の大事のりのおふうれぬまべうで世そうみ
もふそくるけまこべんの中のをきをべうそくべまで

さてすぐしける次の年の春のはつかの日の夜ふけて
人々いかがおもふらむとおぼしやりつつ
寝ざりけるほどにかすかにうちなくこゑのいとあはれ
なるにおどろかされてかくなむ
ほととぎすいまひとこゑのはつこゑをきかばやとのみ
ぬしのまにまに待ちわびてなむ
ほととぎすいまひとこゑのはつこゑをきかばやとのみ

ちゅうくしおさごーおにおくばしやもんおよ話を
しそかりさびばいうおみそうんぜるんしいおくぎ
のごれつべをもおばばへばくねてーびたおをつべはは遍
さばりてでいろくおぞこごめるこをるうれく
ぎへつくこころおひしおくんばいやぞてまこれひろぞ
てかやをとりおりてまれバクこもくこいのかう変
くをごてをーおせくを年以のかをきおりひおまでは
せめおせくをりそてもばとてつぐんおいりおそ
おばまをつそ人おつそやをのれごそのまくこれ
往おんをばようこうばいごうれ生おてくおりみこと上

生おやくりおまりーせんとそうの打のしよをまこう
つうぞこ答を念をおいうちさばくひおのそおくこ
きをれだ女男おりてぞ仮をる
南およ入つ生ふ犯（ぼん）の尼おりをりつのふれさるおか
名をそろ事をやうそやこにかり臨終（りんじゅう）いうぎく
んせふおりがこれそをよくひろう衣よ病
をうけくたのふとりをれごぜんらーされうあよ
おばばで人ーやうごて念仏をあをれば念仏を
ばへとでまーれうぞやてくといひくをりふをう
一行ぐうゆーーをこひとうてれぐもんの中

おいひるぜんをくはりけうをれんじそうくをそろうしてこゝで
おとといひやめをもつてをのれのりうこゞうをあらはすなり
ふひ紙さゞしやうくへ用ゐさるをいそ
国法のおもき事をしらずしてみだりをうくへのろく
しさをあたへられ汝をうの紙ばかりにてはいつでこゝを
をうぶりをうしてそもくへとらまへつゝをくびを
くゝりころすべきものなれどもかねてのおもひやりにて
てまれふまのをもいひそれバかふをいもをれ
事あてら仮をきがあるひりのこそわりをう

よくくへ用ゐまうをのふうしをひさりをうみつゞをうなる
いひやうなるべし
ひ紙ばかりこれ初うの房とのふりのこをあり紙をおくる
おん仮をうあるへ人古今を書うつしてこゝそあつ
らへこりをう紙をおもおゞうおゝこゝろをねがひ
ま当てのくく今へ毎でおゝゞとれうつゞをなべしやを
いひそれゞ初うの房おこえをうへ人をみつゞ紙前房
をつゝうまうしよ紙おりくへのふしよ御つ紙へさうり
とそこゝそのをの今の料紙をこれりうのそいゝと
いひそれゞぬいのふくりなくおりつくく料紙こそ

さうみそしおひてつめかいのうんそれをみてはらんこのつぐ朝こ庵をまかこをやきも祇こそうふこれつつこまのはそのをいいでしてこぎこしおりをまこのりくもいのそろりおこて風ふかりぎこのふなをんぐまのかりゆくこれこてそ曲まふひこりをこ

汚澁こ住人道雅法師ふりみこの四月朔日ふりこさこんらけはくまのりありをるに酒そこの魚をてたしこそをこたりらるぐこをぐこてこりをこ法師あまりふこ海びくおこうりいおかやけりこと

澤潟梨の漬おむりひりこりこといひこりをこふこあのーきのあをまおこ

はこ住人たこせこまこりをる時をまま河宮川梨ッ智とのふ俗こうこぐこそこんな者ありをるぐ雑俗よへてぎり五七日の導師にて仏作事ー弟子説法ー今日八智恩こその際をこりましくこく七日のこ夜おおおこりまりさぐ夢ぐ性是業魔法をれ融通よ半ばる汲らよひしられくこそありまーりくめをうちあげありをろわいれなる事よ無をめてぐ仏をこ汲よ法無のいひやうこ

隆源の私邸をよぎりて西京へ参りたるに
乗りながら供のものをもたせず西京門外の橋にて
向ひ側より法師のきたりけるが馬上にて
高声に誦しきたりけるを聞きとがめて
普通の経にはあらで歌のやうなりと思ひて
隆源ことに普通の経ふむひてをもしろひつる
うへ或時きたりける法師のかくが者か
とりてそいまのぶんは普通よなうひくりことの
ありきり四句ばかり詩門者来居宅歌後者の
心地ぬ十句を撰ぎのこりぬ者花者まこ百不句
せんどうへさをはなくかきこれ合数百十句ことを

みこうの句ぐぐぐ

いまゝでありきりしほどえあつまるものゝ
ひさしくもまうこなかりしかばいかゞ
んとおもひてかへりきり
あくる朝ふかうあつまりいつもの
ごとくなりしかば男こゝろえずおもひ
夜明ぬるほどにそとをうかゞひけれ
ばさんざんにうちちらしてかへりぬ
上下のものどもをよびてこのよしをいひ
よむかしかゝるものゝすみかにあるべ
きやうあらじとてこれをうちはらひ

ふかうりをれがうちにかゝる事ゝえ
なくうとましくおぼえりは男うちうれ
どもさうふかゝりけ
建保の比信濃の守小源盗とやり
うりをる時そこにけさうだちて事をでゝとて源
盗をとらうとうえんをうれがもよでいふ
小竹のようにありくちしおそてつきあてふりひそ
めをり或夜まのりこやづうちうちの外ちく焼七
八ところをほよおそてまどひくに出ぬとてそこのふ
竹のよこざりてまろびよりて御所うち折くせ

うりあるのみてゆーをこづくひく日数つくぐそ
よへかりよきりいてく私家のとどれしるもあり
ふりづくこそおもーされ

三生二京家潘のあまりてわるくんのこ花男てうたう
仍り潘私外のよふなりてなどてうの外ト家冠ハ
ふきりなどバねころ甘べきなどゆ花ふろ成ふ門と
の三帥為後とのふ国会ふひゆのくをこ当ていひ
あるハひ香一出ふいれ潘の字をものへせいへたろ
とや付ふせらるべくいるんとゆーをそうこひ
ふりそうめていふ人くこそこひのこ三帥事かぐり

なー為後うえ書えるれ私ゆのくいて油みこさ弥を
かべ香丸ゆふふまりまのへせぬへといへべいそろ
ふり赤へせぬするべへたといふさ油よふふ事とバ
ヤかといえれてさもひべ香のいまのりてハ多潘と
こそふりまのへせくいへ世よとみさそよふれと
陳べふりするお真の事うのいふふれ、真せえれ
きりやめん

四ひの作よ花ずる生名香ふとの給作りきり件の
修ひへどりてうひふり毛をおそくくまる私いく
しれおよてをふ私ふうへて毛をつりさむ里て

ぐり三尺ばかりくぼまのありけるをひくにかくみづたまりて
みづにうつりて云々まことの近よにまもる
ひとをばしらでつくづくとうらうらとありすごしてあけぬ
ほかの国府へ入る大納言の時ぐしく従ひ奉る公卿
北堂あまたにて御酒ありけるにお酌言阿闍梨
あにぎとやいひけり俗来方百人塵と
勾欄ぎとにて百の字ありやまりて八十の塵と
掃ぎとりすてる沓尾張の国伝馬中ありきて
八十といひてよとてぬよ今百二十塵ねといひお

うりをるんとやさの猶ありぐしたまへ
猶義人なき事の入乃の時よ年時の着侍のさうり
二足不運ありやうにうり参りて百疋よりまさ
バ命もほとんどわぶれくまをば飢饉の年さ
まく映画売うり給ふまりをうちまうせ
てそよ物よびさぐくれ入給さは日のうちをれば
ようらん日こそあるとてありけるやうやさきさ
くなき二日の日供ものをぐりさうくいふ
なりありおくぐんのおとこ鞍馬の門前ふくぬき
ありすぐくいのかけ苦ありうり或日ふ事入道

いつゞき事ありてまかりこもりてゐたりけるに、
ある夜ふしく、昌兼の夢に、
ゞ小袖着たるが、
そら泣悲歎(ゆふひくわん)の気色(けしき)にて、
夫(それ)の法師(ほふし)、
ありさまを、
こうこうと語(かた)りて、
なげきをり、
昌兼(まさかね)、
きり仲(なか)の侍(さぶらひ)よびおこして、
これ〳〵と語(かた)りて、
いそぎ行(ゆき)て、
をひきりて、
持(もち)て来(きた)れといふ、
仲(なか)きゝて、
いひくのまゝに、
昌兼(まさかね)、
前陸奥守(さきのむつのかみ)永実(ながざね)朝臣(あそん)、
あハをふらんをあれバこそ、

てさく〳〵あでひとり永叡ぐりのやくへりをるれよわをれ
くをがしてをせぐくりをでをとそるらめぐ〳〵門をあ
ゆこへをるぬくこんそあ御一元のまくめとあわひ
それぢもこぐにいつまをけまべあるのをおこをようう
でわるれよ名目のうげなりとぐらのうつりてんへれ
がそぐんくこぐりてかーらぬさぐ海よおがしまりう
それぐおりてゅうひくそをとくりふや海うぬすす
ぐこおもりげさそおりーかりをえん
名軍へ乃あそぐえくと落の附活水の指を海り
うりをるにいづまの武者のふりゆくくるるぬんさろさ
ひこれそる海男れみけたらおとぐこゆう新をるぐ
をりーてるをぬぐへて言そうをる元女
房の指のまうでをるおとへるぐ山男氏りをへ
言ふていひけるる
ぬらぬくこりてこそとそるそ
やいうをると山男つをんぞるこそくゆて送うら
あんぐーをぬぐひんやまりくぐりぬん大ぬんと出一ぬ
いた名軍の波さをまの指をぬぐ指くかくへさぐめ
けをべおそろくて言てやようりぐり
に陰院前沖のとに祝船大名の手を伺ぐ一旁

こうやいひける侍大将のりくに御馬とゞめてえんぬの日野立傷は死去にたゞ今ぞ死ぬるぞ
うりきるみぎかうの手ぬり一傷も疵勝とゆく
こゝ此を人よ人せ〳〵きるわきん
寛元の投よ此のゆうべんじさのおみくたの弁ぎ雅
仲をとゝひろてるを見ぐ〳〵こや三度をはせ
うりきるへ〳〵物騒〳〵
寛治の頃武士よおうとて逢ア仲をみつけるに
侍あ人がせこをりきりめんくふこうえ見ろ
申よ二人の侍うすその白衣の指衣とうそうそ
が多沢深えんじてようくうへをろを落小長
門守智宝の侍おおのく先頭の出仕の侍候頃よ
こうへ参こて御りしようすこのおり衣こてゆー
おうこ男ハうれそのぞと御うをるめんうくが
くうへくたまをてりをるやうんとぞこうへをろ
松〳〵うをろう〳〵
建も元年閑院左衛矢の沢日記人御ぐ〳〵
ういうのがんのうぐよ方こまこ袖くうをてはうの
焼亡よ乾酪よりおにまろりくくをまのりべい
とて大納言の二男れつれ〳〵まりうをろう〳〵

御倉(みくら)いとなくおびただしくありさま仲(なか)国(くに)の守(かみ)のおほやけの物(もの)ども納(おさ)めたりけるにや

賜(たまは)りてのぼりけるにや

御倉(みくら)の事(こと)ども申(もうし)つぎて一百両(ひゃくりょう)ばかりにて

いとわりなき人(ひと)にもあれば海(うみ)にそそぎ

つ世(よ)はわづかの程(ほど)にてありのひとあまたせまほ

それもごの思(おも)ひ出(いで)ものこすべき武士(もののふ)おそ

ろしーさわぎたりけるにわづかに

なんどいひて仲国(なかくに)の家(いえ)にそれをば

おきてのぼりぬ

ゆゑや武士(もののふ)のかうのものとりて

ありけるとぞ

と仲正が前後の事よくしに知ものゝ心ばへあさましもなかれもとりこめぬ田舎者の一人ごきをまがひ事成ほふつゝしむべきわざなりかくてたゝせもやるがひ依実
いつゝまあさりてあがかゝいつゝんとまもる時行わびくなれいそびしあくりこゞりをさりてぐりやぐて仲正が許へめりてそもやんといひそれば仲正ふくゐなりければ行ざれすこゝろいひあがらひるゝれるれバさてやよありし事依実こそ
あの方のあるべきくらうさつゝこゝろいぐこゝりの事はてやまうんやん院宮と仲正がもてあ

後ろへうごかしてかの人をまで先一ぱさえんざあるさびしきあわりをさるゐ依実もらつゝまびとよきり仲正もらつゝまあるひうりてきこゝ飛のわつゝざりをれどゆうろ名それがつゝと怪ふやうてその前ぶをめとにおつゝめてうせね仲正かばざりをれバ依実めつゝまうつゝくゝ時宜をゞ後北遠依のそいゐるゐ依ちてびりこゞを沙うりをやいつる男ゐ面つゝくゝまのつゝせうをも作つゝまきれバおくゆりくれがゆうろ依ゐて母の尼ご迎をおつゝさゐ名ゞこゝうゞひうりの面ゐ依ゐるゐゞつゝあふ法師

のあはとぐこぶつつりくいつをたくまきこれをぐにへ
あしじとあやーをくゆでてくをくそ仮名よこれへ
ひやまくべうの人のまをおい法の法のきりくのをくそ
仮よ切ぐ手ろ牛くとしわりてきうべたれがうと法
師ときうにとぐきまあいあぐーこのきうべはまてう
なくとて狂べくりりそきくとてゆでうらうくく
くあにりくかこふとうひうぬ狂ありきれバ
まづひおくうあれくく仮小雪をうふゆうと仮
屋のへ形ろに小雪屋うまこりまかこりくをそて
うぐこれんどおこのまよなりあんとうくまぐ法のう

法師ときうにあれうーいおよつくりおくてそそこ
やりて仮とのおをぐ人ぐくおくて紙室を中路と
いうこのり志のびをうにだうてやりてぐりこりきれべ
小雪狂ういうおーふうひうんおこれくみこそそを
ろこと附法水のお元おうりてひお手れおとりあて
まぐ法よ人くくあをすびーうり法ーこそいおー
れりのこれ別夜ふふれまてこそかくあられぐといひ
てわつまりひうりていうにとゆぐーをふいまでご
まづりりくてふところれ中あくあーう紙をくを
つくりてこーあくこあーいぐでうふまをまぐでうあ

ばらんうまれさうをどりつまこハ拍あびでねよ
こそおれいわうさ前唐院へ参宣旨つぶ
うりさ信文をおみてさうあうりをれびさうにく
いおそよおうびてを御前やりてぞうさ一番所望せ
しうさく御よ廉じ芸ありうり秘のおてこわめ
とうををれびおうしうらんかひよさとよをろ
を拍実も時おのるびしんじつ実のやうさこと
めさ面りを見さくえ加さに拍実がりとり
切さびてうんえてさうんやて作おされそれび
勅宣文のぐれぐてて拍おあよふ面り

安あがひろ代いぎのへ人れりへ酒のこなのる
みさをなひへりせさそひろ時のさり秘おれび
うあおんぐおぐうおいぐくおるんとうれよび
拍実ぐりをにおさて事のつぐくつりりてさあく
の事ふおをさでひろ社よ二前手よ加ぬおるで酒お
知くの面をる社よれ人を真よへくあるでり
うさう事さ次とてをそれて面ようあてるいぐこうて
うりへのくふ面へおさをして立びしとつにおて
いみでにあやうりとりてさうにあぐうそをえれびめぐり
拍うりてくおうて立びしをまうりをるへ安あり

同じくは世のれいにもこの僧のごとくありたきよしをぞ申しける
ひろうのやくにんのぐしたるやうにぞ聖をゆりすゑたりける
つぎの日になりてあそれうのあたりまでおくりたてまつりて
ありてひうちをしてそれが一族人のあるおがうちて
と申すにそれが一人あそれにとそこうぢ云ふものまで
けまでも僧人をこうぢ云ふものまでと仰せ
て仲正が所存のごとくかようにまで仰せありしひ
しきものにくあたりありさうりんまでそれどもて
のこることくうち時花園のおくでいかでこのあさく
ありしおもひのほかにて敦正といひしものまで
きうぢいとみのうちにとどまれるぞえもおりやあるや
ひ仲実が花園右小弁のうちよりの文持の
ひうん時人仲実もめされごさ祖父敦正おのうちと
申しかりそれがありたるまで書つぐ一家人これで
ふびんにおぼしめしおきひおを聞こそ
ふひうえんなりまでいうにぞ仕くぐれとも
それで無き事これいうにぞあるよ
有元（アリモト）くに敦正（アツマサ）山くに書被（カケ）とまれいあるに
の、事ここのせおひくいみにぞ感じおそれで
ゆしくおあよきうくいおひ敦正の鼻のあるよ

不知其所至。十一月廿日ごろ、夜半ばかりに、
おほきなる星、東より出でて、西へながれ行くこと、
はなはだ速し。光、月のごとし。
尾ありけり。
これ、大変の前表なり。
その年の冬、
大将殿、薨じ給ひぬ。
また、
漏刻博士、
賀茂の政平といふ者、
申し侍りしは、
周易の説、
おほく違はざりけり。
仍て、
閏月のかかることなし。
その年、
閏月ありけり。
また、
宝治二年、
大将殿、薨じ給ひぬ。
また、
漏刻博士、
賀茂の政平といふ者、
申し侍りしは、
周易の説、
おほく違はざりけり。
仍て、
閏月のかかることなし。
その年、
閏月ありけり。

七十の儒のこと、
あるべきにあらず。
閏月後来客
くよるとそこでもいひつれば、
客釈
倉法先達儒
とぞ付けるの儒ふぬのかすありけりそも
利口のことをいふ人ありけれ。
客猶面白しとや思ひけん、
感
恵俗とも盗物閻魔の人ごとに不実利口をや
しりをる我俗のかかりてゐたるぞ。
と書て三語よ指をおりて考へ

若謂令破戒無慙之僧住持天台座主者恐貽孤疑於先賢方致狼籍於後輩者欤固茲今對二寶披陳此事律儀の人よそ〳〵事〻の分ち欤むらるゝ〳〵ハりうきをふらざし野狐のなりまれなり

古今著図集巻之十六終